

大平通商産業大臣にお仕えして

大慈 弥嘉久

昭和四十三年の十一月から四十五年の一月まで約一年二カ月、通産大臣をおつとめになつてゐる間、大平大臣にお仕えするという縁を私は持った。一年二カ月のうち、私は通産省の企業局長として一年、事務次官として二カ月であつた。

大平大臣が、まず遭遇され力をおいれになつた事柄として、鉄鋼の大型合併があつた。八幡・富士の合併問題として、経済界だけでなく広く世間の問題となつた事件である。当時は経済の国際化時代を迎えて、産業の構造改善と企業合併の問題は産業政策の立場からも大きな課題であつた。独禁政策との調和を図りながら、その壁を乗り越えてこの大型合併は実現したわけであるが、この間、大臣は随分苦心をし、対処されたことであつた。

われわれ通産省の関係者は何度か、個人としての意見まで忌憚なく聞かせると、大臣に呼ばれたのが記憶に新しい。その間、常日頃は悠揚迫らざる大臣が、感情を強く表にして、期限を切つての短期解決の意向を強く打ち出されたこともあつた。

このような経過のうちに、産業の構造改善は着々と進んで行つたわけである。大臣は民間企業の自主性を尊重し、企業の活力を最大限に発揮させることを、持論としてお持ちになつてゐたように思われる。このような考え方は、一九七〇年代を迎える「新通産政策の基本的方向」として結実して行くわけである。

日米間の問題として、日米両国を共に揺がすことになつた日米繊維交渉も、大平大臣のときに明確になつてき

た。日米経済合同委員会の際、コーヒー・ブレイク中に行った大平・スタンプズ会談で、具体化の一步を踏み出したと記憶する。この間「ルールを踏みはずさないように。足元を見ずかされないように」というお考えが流れていたように思う。

資本自由化の問題や万国博覧会の進捗問題等、他にも種々あったが、この間、同じ飛行機で関西等にお伴をしたことも両三度あった。そのようなある時、飛行機のなかで、中国についての見識を詳しく述べ教示されたことも思い出す。後年の日中復交につらなるものであった。

仕事の上ではいうまでもないが、人間として多くのご教示を賜った。新入省者の歓迎会の挨拶で「同期生とはいつまでも仲良くしなければならぬ。とにかく勉強することだ。役所の生活は、第二の実業界での生活にもつながる。結論として、愛され、敬され、信頼される人になれ」という趣旨の訓示をされたことがあった。

愛され、敬され、信頼される人柄とは、まさに大臣ご自身のことでもあったように思う。だからこそ皆安心してついでに行くことができたのだと思う。と同時にこのような大きな風格のなかに細かい神経をも感じられるところであった。築地の栄家の女将が、大平さんは細かい神経の人ですよ、と話していたことも印象深い。

今ひとつ忘れ得ないことは、大臣がご長男の正樹氏に先立たれたことをお書きになった「長男正樹の思い出」という文を拝見した時のことである。血涙下る悲痛な思いを筆に托されたご心情を思い、大臣のお人柄の底を流れるものを思わざるを得なかった。このことについて大臣には何も申しあげなかったが、大臣の何ともいえぬあの笑顔に接するたびに、大臣の右の文を思ったものであった。私は今あらたに、偉大な人格にお仕えしたという恵まれたご縁を思い、欣慕の念を深くしている。

(アラビア石油社長)